

牧野

新日本植物圖鑑

加藤良一 令和4年(2022)3月3日

植物分類学者**牧野富田郎**博士（文久2年(1862)–昭和32年(1957)、高知県高岡郡佐川町出身）が生涯をかけて編纂した植物図鑑が筆者の手元にある。これは、昭和48年12月20日発行の第25版(頒布番号54169)、初版は昭和36年6月30日に発行された。サイズはB5版、学名はカタカナでなくひらがなで書かれている。図鑑の類でこれほど版を重ねるのは珍しいことではないだろうか。

巻頭を飾る細密画「**やまもも**」を描かれたのは**川崎哲也**さんである。牧野博士が亡くなる数日前に書き上げ、病床へ届けた作品である。川崎さんの妹さんは、筆者の合唱仲間である新島聡幸^{としゆき}さんの奥様依子さんである。

❁ 牧野博士が求める植物図とは

牧野博士が描く植物図には、緻密性と自らの植物学における信念が凝縮されている。その一大特長は、植物の全体像を描ききることである。同じ植物でも個体によってすこずつ姿かたちが違う。形の差も含めて、その種の平均的な全体像を描くことに腐心したのが「牧野式植物図」である。即ち、一つの図の中に茎、葉、花、実など植物全体が分かるように盛り込むのである。

ある一つの植物の典型を描かねばならないとなると、日本中くまなく歩きまわり、より多くの個体を観察し、そこから普遍化へとまとめ上げねばならず、正確を期そうとすれば膨大な調査が求められる。大変根気のいることである。

精密な牧野博士の図に影響された研究者は数多くおり、その流れを汲んだ画家には、水島南平、川崎哲也、太田洋愛などの各氏の名が上げられるという。

❁ 足で集め、手で描き上げる記載学

生物ごとに、その特徴を学術的に記録し残すことを「記載」という。植物分類学の中心は、植物の記載学であ



やまもも Myrica rubra Sieb. et Zucc.

る。まだ日本の植物の全体像が解明されず手付かずだった時代に、自ら全国を歩き回って調査・採集し、未知の植物に学名を付けていった。牧野博士没後、東京都練馬区の牧野記念庭園に残された標本約40万枚は、まだ正確に数えてはいないという。

❁ 心残りは植物解説文のぼらつき

昭和15年(1940)の序文(↓)にも反省を含めて書かれているのが、「解説の精粗不揃いの点」である。

然カシ、本書ハ尚小生ノ理想ニハ遠イモノデアル事ヲ白状スル義務ヲ小生ハ有スル、故ニ小生ニ取テ本書ニ対シ何ント無ク物足り無イ実感が我が胸一杯デアル、止ム無ク是レハ将来漸次ノ改善ニ待ツヨリ外致方ノ無イ者デアル、又本書ヲ開テ先ヅ第一ニ感得スル事ハ其解説ノ精粗不揃ノ点デアル、即チ前ニ粗ニ後ニ密デアルノハ、実ハ最初ハ其程度ヲ適当ト認メテ文ヲ行ツタノガ、年月ノ移ルニ従ヒ漸次ニ精粗ノ度ヲ加へ、遂ニハ多少行キ過ギタ貌チト成ツタノデアル、但シーノ書物トシテ是レハ頗ル不体裁タル譏リヲ免カレ得ヌノデアルカラ、後來訂正版ノ出現スル際ニハ躊躇無ク之レヲ統一スル事ヲ期待シテイルノデアル、



1141. ぶんこうめ (ばら科)
Prunus Mume Sieb. et Zucc. var. Bungo Makino

果樹として栽培されている落葉高木でウメの1変種である。枝は太くて丈夫で、小枝は通常深紫色、葉の形状はウメに似ているが、もっと大形である。卵形で先端は細長くとなり、ふちには小形のきよ歯がある。花は通常ウメよりも大形で、径2.5~4cmぐらい、八重咲きになる傾向がある。まれに一重咲きの5弁のものがある。淡紅色あるいはばら色、時には白色で、花柄は非常に短く、ほとんど枝に接着する。がくは赤紫色で後にそりかえる。がく片はがく筒よりも長いか、あるいはほぼ同長。花の蜜腺は黄赤色。花弁は円形で基部は細くなりごく短い柄がある。雄しべは多数、花弁よりも短い。雌しべは1本、子房と花柱の下部にはともに毛がある。果実は大形で、径5cmにもなり、熟すると黄赤色になり、褐赤色の斑点がある。〔日本名〕豊後梅。豊後の国(大分県)から出て世にひろまったからである。

1142. すもも (ばら科)
Prunus salicina Lindl.
(= *P. trifolia Roxb.*)

支那原産の落葉高木で、日本には最も古くから渡来して来ているものと思われる。現在ではひろく果樹として栽培されているが、また野生状態になっている所もある。木は高さ3m以上になり、枝は多数分枝して横にひろがる。若枝には毛がなく、光沢がある。葉は互生し、細長い長楕円形または倒卵針形、あるいは倒卵状皮針形、長さ7cmになり、先端は鋭形または鋭尖形、基部は鋭形で有柄、表面は主脈に沿ってわずかに毛があるが、他の面は無毛。春に長い花柄をもった花を1~3個、散形花序につける。がくは長倒卵形で5片、花弁も5、白色で楕円形。雄しべは多数、雌しべは1。花柄はがくの2倍ぐらいの長さがある。核果は球形、赤紫色または黄色に熟し、酸味に富んでいるが、完全に熟すると甘く、生で食べられる。ボタンキョウ、ヨネモモ(イクリ)、トガリスモモ(バタンキョウ)等は本種の変種である。〔日本名〕酸桃の意味で果実は酸味が強いからである。〔漢名〕李。西洋スモモ(*P. domestica L.*)は、いわゆるプラム(Plum)であり、果実はスモモに似ているが、葉は比較的幅広く、倒卵形であるので、区別できる。



1143. もも (ばら科)
Prunus Persica Batsch.
(= *Persica vulgaris Mill.*)

支那原産の落葉低木または小形高木。古くから日本に渡来していたものらしい。通常観賞用または果樹として、ひろく栽培されている。時には全く野生状態になっている所もある。木の高さ3mぐらい。枝は無毛、若枝には粘り気がある。葉は互生し、長楕円形、細長い皮針形または倒卵針形、先端は次第に細くなってとなり、基部は鈍形、長さ5~10cm。若葉には多少毛がある。4月初めに、葉よりも先にまたは葉と同時にごく短い花柄をもった花を開く。花は通常淡紅色で一重咲きであるが、白色、濃紅色、咲き分け、八重咲き、菊咲き等のいろいろの品種がある。がくは5有毛。花弁も5、水平に開き、雌しべは多数、雄しべは1、子房は毛を密生する。核果は大形で細毛を密着し核は大形で表面にはいちじくしくわがある。果実は初夏に熟し重要な果物である。ツバイモモは果実に毛のない1変種で漢名は油桃。一名光桃といい、西洋ではネクタリンといって、その改良品種は最も味が良い。また水蜜桃も良い果実を生ずる品種である。葉は民間薬として利用される。〔日本名〕桃はマ(真実)モモ(百)モモ(百)の音読があるが何れも肯定しがたい。日本では丸くて中のかたいものをモモといひ、今日のヤマモモを単にモモといひたのに対して、大陸から本種が入り、それにとっかわったものであるとの説が最も妥当と考える。〔漢名〕桃。



1144. はなもも (ばら科)
Prunus Persica Batsch. forma

モモの園芸品種で庭木あるいは切花用として、各地で栽植されている落葉性の小形高木。木の高さ2~3mぐらい。枝は直線的に伸びて無毛、若枝は緑色で粘り気がある。2年目の枝は暗紅紫色をおびて光沢がある。葉は互生し、線状皮針形、先端は次第に細くなってとなり、基部は鈍形で短い柄があり、ふちには小形の鈍きよ歯がある。4月初めに葉よりも少し先に花を開く。花は短くて太い柄があり、枝に接着し、がく筒はつりがね形、がく片は5、水平に開き、内面には毛がある。花弁は八重咲きで20枚以上あって大小いろいろの形がある。水平に開き、内部には多数の雄しべ、および花弁と雌しべの中間形のものがある。濃紅色または純白色の八重咲きの品種が普通で、いわゆる花桃といわれている。果実は小形で有毛。



最初はその程度を適当と認めて書いていたが、その後少しずつ精緻の度を加えるという変遷を経て、いつの間にか全体として統一性のない解説となってしまったと述懐している。また、原稿はすべて発行元についており、訂正したくとも簡単には手が付けられない、この不統一を招いた自らの不用意を悔やんでいる。

一例を上げると、左図のように解説の内容や分量も様々で活字の大きさを調節して枠に押し込むなど統一感が弱いということである。

❁ 自然分類表に基づく目次

『牧野新日本植物図鑑』は、自然分類表に従って編纂されている。

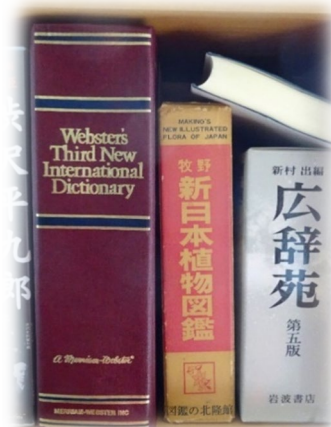
32億年前、太古の地球に光合成生物が誕生した。それ以前にも生物はいたが、現在とはエネルギー代謝機能が全く異なる。

従って、光合成生物誕生をもって生命誕生として差し支えないだろうといわれている。

その後、進化・分化・退化が繰り返され、現在地球上の生物は、500万あるいは3000万種ともいわれている。その中で、植物種は約35万種ある。32億年前は単細胞微生物であったのが、徐々に植物種が増えてきたが、そこにはおそらく連続した進化や分化の道筋があるはずで、これを「系統」という。

形態や生理の機構あるいは、生体内の代謝に至るまで、ある系統に属する種の間には、いろいろな類縁関係がある。生物の進化、分化の道筋に基づいた分類学の手法を「系統分類」とか「自然分類」と称している。それに対して、リンネを初めとする古典分類学は「人為分類」である。現代の分類学は、ほぼ系統に沿って配列した「系統分類学」である。

目次は、「菌植物門」(p.959)から始まり、「地衣植物門」「紅藻植物門」「褐藻植物門」「緑藻植物門」「輪藻植物門」「こけ(蘚苔)植物門」と並んだあと、「しだ(羊歯)植物門」(p.1)に戻り、「裸子植物門」「被子植物門」と続く、やや変わった配列になっているが、自然分類を踏まえるところなるのであろうか。収載されているのは、日本に自生しているものを主とし、それに栽培種も加えた3896種である。



❀ 変わり種植物、牧野博士のお茶目さ

植物の名前は、けっこう身近なものに絡めてつけることが多いが、牧野博士も直感的とも思える命名の仕方をしているフシがある。図鑑からいくつか紹介するが、すべてが牧野博士の命名ではないと思う。

◎ **おいぬのふぐり**(2234 こまのはぐさ科)：明治初期に我が国に入ってきた帰化植物で、日本の在来種「いぬのふぐり」より大きいところから、そう名付けられた。果実が犬のふぐり（陰囊）によく似ているので、そのまま不名誉な名前を頂戴してしまった。ところが、俳人・高浜虚子は、「犬ふぐり星のまたたく如くなり」という句を残しており、これは「地面いっぱい咲くおいぬのふぐりの小さな花卉が、あたかも空から降ってきた星のようだ」というきれいな句である。さらに、日の光が当たると輝く花びらが星のように見えることから、別名「星の瞳」とも呼ばれており、これで面目躍如であろうか。

◎ **へくそかずら**(2336 あかね科)：文字通り^{へくそかずら}屁糞葛または屁臭サカズラである。なんともすごい名前を付けたものである。「やいとばな」「さおとめばな」ともいう。

◎ **くさぎ**(2071 くまつづら科)：臭木で葉に臭気があるので名付けられた。

◎ **わるなすび**(2280 なす科)：繁殖力が強く、刺があって始末がわるい雑草であることによる。ここで、牧野博士は「雑草」と解説しているが、図鑑を離れたところでは、「雑草という植物などない」が口癖だったらしいが…。

◎ **むすびとはぎ**(1225 まめ科)：盗人萩。泥棒が室内に侵入するとき、足音がしないように足の裏の外側を使って歩くその足跡の形に豆巣が似ていることから名がついた。

◎ **しょうべんのき**(1456 みつぼうづぎ科)：まさに小便の木である。この木を切ると、水がたくさん出てくることから命名である。なんとも不名誉な木だ。

◎**うばひがん**(1147 ばら科)：「えどひがん」「あずまひがん」とも呼ばれる。^{うば}姥(老婆)はふつう歯が抜けることが多いが、この種も春先に葉のないうちに花が開くので、これをかけて「うば」の名を付けた。

◎**ばくちのき**(1171 ばら科)：「びらん」「びらんじゅ」とも呼ばれる。文字通り博打の木の意味。樹皮が脱落して木肌があらわれるのを、人が博打に負けて身ぐるみ剥がされ裸にされるのになぞらえたもの。

◎**ままこのしりぬぐい**(487 たで科)：継子の尻ぬぐいで、逆向きの刺のある茎で継子の尻をぬぐう草という意味。キリがないので、このあたりで終わりにする。

❁**むくのき**(372 にれ科)：「むく」「むくえのき」とも呼ばれる。果肉が甘いので子どもが食べ、葉はざらざらしているのでものを磨くのを使うというが、ムクの意味に正解はないという。剥くの意味かもしれない。

※「むくのき」で思い出すのは、若くしてガンで亡くなった合唱指揮者・^{むくのきみひろ}椋木公洋さんのこと。

1985年島根県益田市出身／2006年立正大学グリーンクラブ・学生指揮者／男声合唱団「獅子16」指揮者／享年26歳

❁**すえござさ**（写真下）は、この植物図鑑には載っていないが、昭和2年理学博士の学位を得て、いよいよこれからというときに、寿衛子夫人は55歳でこの世を去ってしまった。最愛の夫人を偲び、その前の年に仙台で発見した新種のササに夫人の名を冠し、「スエコザサ（学名ササエラ・スエコアナ・マキノ）」と名づけた。

夫人の墓は、谷中天王寺に牧野博士の墓とともにあり、墓碑には博士の俳句が二句、亡き夫人への限りない感謝と愛情をこめて深く刻まれている。

世
中
の
あ
ら
ん
限
り
や
ス
エ
コ
笹

家
守
り
し
妻
の
恵
み
や
わ
が
学
び



❁ 近代日本における植物図鑑の発達

植物学が学問体系として形を整え始めたのは、明治の初めのものである。それまでは江戸時代の博物学や浮世絵に見られるように一部の愛好家のあいだで広まっていた程度だったのだろうか。

『造園雑誌』(57(1):1-15, 1993)に掲載された**俵 浩三**氏の研究論文「近代日本における植物図鑑の発達とその背景」の冒頭要約に、「『牧野植物図鑑』の成立には、牧野を敬愛する人々によってつくられた英雄伝説的な"誤伝"があること、を明らかにした。」と記載している。学問の世界でもやはり競争原理が働くのが常であり、研究者間の確執があっても一向におかしくはない。

摘要：植物への理解を深めることは造園学の重要な基礎となるが、植物情報源として大きな役割をはたす植物図鑑の発達史は、造園史、植物学史、理科教育史の分野を含めて十分に研究されていない。そこで、(1)明治以降に出版された一般野生植物を対象とする植物図鑑の発達史を展望して時代区分を行い、その特徴を明らかにするとともに、(2)とくに明治40年ころに近代的、啓蒙的植物図鑑を出現させた原因には、当時の初等理科教育における博物重視と、画一的ではない「身近な自然」を教科書とする教育の方針があったこと、(3)さらに「牧野植物図鑑」の成立には、牧野を敬愛する人々によってつくられた英雄伝説的な"誤伝"があること、を明らかにした。

以下に、**俵 浩三**氏の研究論文を引用し、植物図鑑の変遷がどのようなものであったか振り返ってみたい。

(1) 明治初年～明治30年代

江戸時代の博物学、本草学から近代植物学への移行期で、植物図鑑も浮世絵的な木版画から西欧植物学の手法をとり入れた精緻なものへ脱皮する時代だった。

(2) 明治40年ころ～大正末期

明治40年ころは斎田・佐藤『内外実用植物図説』(1907)、坂庭・萱場『新編植物図説』(1908)、牧野校訂・村越『植物図鑑』(1908)などの植物図鑑が数多く出現し、近代的、啓蒙的植物図鑑の成立期といえる。以降、大正前期まではそれらが版を重ねる時代だった。

(3) 大正末期～昭和30年ころ

大正末期に村越『大植物図鑑』(1925)、牧野『日本植物図鑑』(1925)が発行され、以降、昭和30年ころまでは村越『内外植物原色大図鑑』(1933-35)など牧野『牧野日本植物図鑑』(1940)が代表的な図鑑となるが、牧野と村越は感情的対立があり、牧野は村越の図鑑を「インチキ本」と酷評した。

(4) 昭和30年ころ～現在

日本の野生植物のすべての種を検索できる本格的図鑑として北村他『原色 日本植物図鑑・草本編』『同木本編』(1957-79)、佐竹他『日本の野生植物・草本』『同木本』(1981-89)が実現され、またカラー写真の普及と印刷技術の向上によって原色図鑑が主流を占めるようになる。さらにジュニア専門の図鑑や地方単位の図鑑、あるいは野外観察用図鑑など、多彩な植物図鑑が普及している。

(5) 明治40年ころに植物図鑑が多く出現した理由は、当時の初等理科教育では植物を中心とする博物学が重視され、しかも教科書は活字でなく "学校および周辺の身近な自然" という方針が文部省からだされたので、現場教師が教材を発掘するのに困惑し、指針となるような植物図鑑の出現が待望されたためであった。

(6) 『植物図鑑』は牧野の著作で明治40年に発行され、「図鑑」の語源となり「図鑑形式」の元祖となった、という説が広まっている。しかし、これは牧野の英雄伝説的な "誤伝" であり、図鑑という言葉は「植物図鑑」より古くから使われ、図鑑形式も「植物図鑑」に先立つものが存在し、しかも『植物図鑑』は牧野の著作ということではできず、発行も明治40年ではなく41年であることが立証された。



[虫めがねTopへ](#)



[Home Pageへ](#)